

研究旅行要旨

近代国家への礎～幕末の戦地から読み取れる政治的、外交的状況～

19AR099 小田理華子

新政府側は薩長を中心として西洋諸国と実際に交戦し、鍋島藩は長崎防衛を経験し、直に西洋諸国の脅威を感じていた。藩内には攘夷論が主流であっても、下関戦争後に西洋諸国と協定を結び、軍事や産業、さらに思想を取り入れるようになった。西洋文化を受容することで、武器を使いこなせるための訓練、戦術、さらに専用の弾丸が必要な銃でもその補充が可能となった。

旧幕府軍側（本研究では主に会津藩）は直に西洋諸国の脅威に触れる機会が少なく、また藩内では西洋文化を受容する態勢ができあがってなかったため武器を仕入れたとしても、使いこなせるだけの訓練が足りず、専用の弾が必要な銃の弾丸を大量に用意できなかった。

また天皇の存在が双方の士気にかかわっており、孝明天皇の亡くなる前後で状況が変化した。単純に武器の性能差や戦術が勝敗を決めたのではなく、上記のようにさまざまな要因が重なって勝敗を喫した。

(本文字数 382)

2016 年度 研究旅行奨励制度 報告書

近代国家への礎
～幕末の戦地から読み取れる政治的、外交的状況～

19AR099 小田理華子

目次

1. 着想
2. 旅行日程
3. 幕末で使用された主な武器の説明
4. ペリー来航
5. 下関戦争
6. 禁門の変
7. 第二次長州征討
8. 鳥羽伏見の戦い
9. 会津戦争
10. 箱館戦争
11. 考察
12. 謝辞

13. 参考文献

1. 着想

京都霊山歴史館には見せかけだけの木製で作られた大砲が展示されていた。しかし50年後の日露戦争では世界一といわれたバルチック艦隊を破るほどの軍事力を備えた。では、なぜ日本はそれが可能であったのか。幕末の戦争の結果はその後の政治的、外交的状况に大きく影響した。本研究では幕末の戦地を調査することで、使われた武器、主に銃や大砲を調査し、それがどのように近代国家への礎を築いたのか調査した。

2. 旅行日程

2月15日	福岡→下関→京都	下関市立歴史博物館、壇ノ浦砲台跡
2月16日	京都	霊山歴史館、京都御所
2月17日	京都→熱海→下田→熱海	下田開国博物館
2月18日	熱海→会津	鶴ヶ城
2月19日	会津→函館	新幹線での移動のみ
2月20日	函館	五稜郭
2月21日	函館→東京(新幹線) 羽田→福岡(ANA 265便)	帰福

2月16日に予定していた鳥羽伏見の戦いの弾丸調査は体調不良で不可能であった。

3. 武器についての説明

今回の調査では、大砲と銃に焦点を当てる。銃に関してはゲベール銃、ミニエー銃、スペンサー銃を、大砲に関しては四斤三砲、アームストロング砲を比較した。銃も大砲も銃弾の形によって飛距離や命中率が変わる。尖塔形は球形の約三倍の飛距離を持ち、空気抵抗を受けないため、命中率も約三倍を誇る。



球形と尖頭形の弾の比較(2017年2月15日 下関市立歴史博物館 本人撮影)

まず、ゲベール銃であるが、これは1670年代にフランスで発明されて以来2世紀経っているため、時代遅れの銃であった。そのため、弾丸は球形であり弾道が定まらず、飛距

離も約 300m と期待できない。

次にミニエー銃であるが、球は尖頭形と球形双方可能であり、ライフル機能がついているため命中率がやや高く、飛距離も約 500m である。

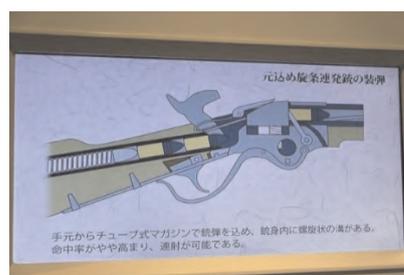
最後にスペンサー銃の球は尖頭形であり、ライフル機能がある。これらのなかで命中率も飛距離も約 700m と高い。しかし、その分専用の球が必要である。そのため、ミニエー銃を持っていたとしても弾丸の補給が出来なくなった時点で戦闘不能なのである。



ゲベール銃の説明(2017年2月18日 若松城天守閣郷土博物館 本人撮影)



ミニエー銃の説明(2017年2月18日 若松城天守閣郷土博物館 本人撮影)



スペンサー銃の説明(2017年2月17日 若松城天守閣郷土博物館 本人撮影)

四斤山砲は青銅製であるため、国内での鑄造が可能であった。弾丸は椎の形である。最大射程距離は 2600m。また西南戦争時も使用された。



四斤山砲の説明(2017年2月17日 若松城天守閣郷土博物館 本人撮影)

アームストロング砲の弾丸は鉛套式であり、最大射程距離も 3600m である。



アームストロング砲の説明(2017年2月17日 若松城天守閣郷土博物館 本人撮影)

4. ペリー来航

旅行以前ではペリーは最新式の武器を使っていたと考えたが、下関市立歴史博物館の資料によるとペリーも以前から使われていた球形の砲弾を実践練習として使用していたとある。江戸時代は比較的泰平であったため、武器の発達はなかった。その証拠に禁門の変、鳥羽伏見の戦いでは幕府軍の一部は火縄銃を使っていた。こうした事実は欧米諸国と比べ、当時の日本の武器の発達の遅れを表していると考えられる。また、日本側の軍備についてはペリー側の記録には以下のように記されている。

日本側は幔幕の末端近くに武装船を並べ、分遣隊がその幕の前に武装して、密集列隊をつくっていた。(中略) 数門の貧弱な野砲が正面に据えてあった。(中略) 多くの部隊が剣付きムスケット銃で武装し、そのほかの者は槍で武装していた。ⁱ



1853年ペリーが小笠原沖で実弾演習したもの
(2017年2月15日 下関市立歴史博物館 本人撮影)

5. 下関戦争

下関戦争時点で長州藩は軍艦を失っていたため台場を造営した。四ヶ国艦隊の戦力は軍艦 17 隻で、使用した弾丸は主に尖頭形で飛距離と命中率は長州藩の二倍から三倍である。また、この期間の長州の軍隊の様式は和式が主流で関門海峡は入り江が狭く、少しの武器の性能の差が勝敗を分けたと言えよう。

敗戦後、長州藩は欧米諸国と交易することにより軍事や産業の近代化を推進する。それは後の戊辰戦争に大きな影響を及ぼすことになる。



関門海峡(2017年2月15日 本人撮影)



天保製長州砲(2017年2月15日 壇ノ浦砲台跡 本人撮影)

6. 禁門の変

禁門の変では、公武合体派(主に会津藩、薩摩藩)と攘夷派(主に長州藩)が武力衝突した。勝敗を決めたのは武器の性能差とを考えていたが、武器はどちらもゲバール銃を使用していたので、長州藩の意思が統一されていなかったのが最大の原因だということが今回の調査で明確になった。

また蛤御門の弾丸の調査を実施したが、建て替えの関係で当時とは門の向きが違うことが判明した。今日の門は東西に走っているが、幕末期は南北に走っていた。そのため長州の言い分が「おれたちは御所に向かって発砲してない」というものだったことも納得でき

る。



蛤御門の弾丸跡（2017年2月16日 本人撮影）

7. 第二次長州征討

長州藩は薩長同盟を薩摩藩と結ぶことによってグラバーから最新式の銃であるミニエー銃を入手した。また、大村益次郎が適塾や咸宜園で西洋の兵学を学んだことも大きく戦いに影響し、第二次長州征討では散兵戦術を用いた。散兵戦術についての福山藩士の陳述は以下のとおりである。

散兵に分かれた兵士は、物陰に隠れて身体を表さず攻撃してくるとしている。さらに、一発撃つと場所を変えるとしているが、これは、当時の黒色火薬は、爆発すると大量の白煙を生じさせるため、それを目当てに攻撃されるのを避けるためである。また、ミニエー銃は先込め式であるが、低い姿勢で弾込めするため、身体を現さないとしている。そして、兵士は各自の自発性に基づいて、巧みに自然物を利用して、広く散開して攻撃してくるが、福山藩士は、恐怖心のためにより集まってしまうため、ますます弾に当たってしまうとしている。ⁱⁱ

近代的武器と戦い方が効果的に組み合わせられた結果であろう。また、第二次長州征討では奇兵隊の活躍も挙げられる。奇兵隊は身分差別をなくした部隊で指示を一本化することが可能になり、近代兵器の使用に向いていた。この戦いの勝利には孝明天皇の崩御が大きく影響した。孝明天皇は攘夷派であったが、長州藩の過激な攘夷論には同意できず、禁門の変で朝廷は公武合体派についていた。孝明天皇の死後、朝廷は倒幕派に味方することになる。このため、長州藩の士気は幕府軍側と比べて高かったことは大きく勝敗に影響した。幕府軍側には未だに火縄銃を使う部隊もいた。近代兵器もゲベール銃を使用しており、寄せ集めの部隊であったため士気も低かった。

8. 鳥羽伏見の戦い

この戦いでは、旧幕府軍の兵力は15000人で、主にゲベール銃、一部は火縄銃を使用し

ており、対して新政府軍の兵力は 4500 人でミニエー銃を使用していた。また、鳥羽伏見の戦いでは錦の御旗が新政府軍側に立ったことで旧幕府軍の士気が低下した。

9. 会津戦争

会津戦争では大砲が主に活躍した。主な戦場となった鶴ヶ城は難攻不落の城と言われていたが、大砲や銃などの近代兵器が使用され陥落した。

新政府側の鍋島藩は小田山からアームストロング砲を撃ち、それが天守閣に被害を与えた。現地調査で小田山は天守閣から近く感じられ、鶴ヶ城に多大な被害を及ぼしたと考えられる。鍋島藩は江戸時代に長崎警備を福岡藩と交代で頼まれた藩であったため、薩長のように実際に外国と戦争した経験がなくても、幕末における近代兵器の重要性を感じ、手に入れることができたと考えられる。このような藩が新政府軍側についたことも戊辰戦争における勝敗の一因であろう。



小田山(2017年2月18日 鶴ヶ城天守閣から 本人撮影)

また、会津藩内では銃は下級武士が使うものと認識され、禁門の変で火縄銃が雨天時に使用できなかったため槍や刀を重視し、鳥羽伏見の戦いまでは身分に基づいた戦術である、長沼流が主流であった。さらに、会津藩は京都守護職を任され、それには莫大な資金が必要とされた。そのため軍事費には予算をかけられず縄張りや石垣等を見捨てた戦いとなり、太刀打ちができなかったと考えられる。

10. 箱館戦争

五稜郭は元来箱館奉行のために建てられたもので、軍事目的で建てられたものではなかった。フランス軍艦コンスタンティーン号副艦長の示唆により稜堡式城郭で建てられたが、他のヨーロッパの国々では台場が主流になっていたため、軍事施設としては時代遅れとなっていた。

榎本武揚を初めとする旧幕府軍は蝦夷地の天候を軽視したため、新政府軍より海軍力を誇っていた軍艦開陽丸と運送船神速丸を失ってしまった。そのため、西欧諸国が中立撤廃の姿勢を明らかにし、甲鉄艦(後の装甲軍艦東艦)を新政府軍に譲った。これにより、海軍力は新政府軍側のほうが優位にたつた。甲鉄艦はアームストロング砲を装備しており、沿岸からの射撃が五稜郭に届いた。対して旧幕府軍の大砲は 24 ポンド砲で打ち返しても近

隣の畑に落ちるのみであった。沿岸から五稜郭までの距離を目視で確かめたかったが、天候不順のため不可能であった。



空撮(夏)(五稜郭タワー木村様より提供)

11. 考察

旅行以前は武器の性能が良い方、戦術に優れていた方が勝利していくと考え、このテーマを設定した。しかし、学芸員の方々の話を伺うと孝明天皇の崩御、藩内での雰囲気、家訓、海外との戦争の有無、長崎警備の経験、弾丸の補充など総合的に合わさって勝敗がきまっていたと感じた。会津戦争では新島八重がスペンサー銃を持っていたにも関わらず、会津が敗北した原因も弾丸の補充が肝であったと新しい視点が得られた。また、朝廷が幕府側か、倒幕側につくかによって、士気の有無が鳥羽伏見の戦い以前より存在しており、天皇の存在も大きく影響した。今後は近代武器の礎を作った高橋秋帆、薩長同盟に大きく貢献したグラバーなど、長崎がこの時期に果たした役割や影響を今一度考えてみたい。

12. 謝辞

本研究旅行にあたって下関市立歴史博物館の稲益あゆみ様、岡松仁様、霊山歴史館の木村武仁様、下関開国博物館の尾形征己様、若松城天守閣郷土博物館の中岡進様、湯田祥子様、五稜郭歴史回廊の木村朋希様には多大なご協力をしていただき、感謝いたします。

13. 参考文献

『武器と防具 幕末編』 幕末軍事史研究会 新紀元社 2008年3月17日発行

『日本軍事史』 高橋典幸・山田邦明・保谷徹・一ノ瀬俊也 吉川弘文館 2006年2月10日発行

図説幕末維新の銃砲大全 編集人 藤原清貴 洋泉社 2013年7月5日発行

下関市立歴史博物館開館記念企画展リーフレット

五稜郭歴史回廊ガイド VOL2 五稜郭激動編 編集・発行 五稜郭タワー平成23年10月1日発行

(本文文字数 4301 文字)

-
- i 『日本軍事史』 高橋典幸・山田邦明・保谷徹・一谷俊也 吉川弘文館 2006年2月10日発行 240頁
- ii 『薩長戦争』 三宅紹宜 吉川弘文館 2013年3月20日発行 177頁